Japanese association of educational psychology

発　達　2144

# 幼児の記憶における記憶目標を有意味化する文脈の役割

山田　紀代美
（お茶の水女子大学 人間文化研究科）

【問題】Istomina(1975)によれば、就学前児は遊びのような活動文脈の中に記憶課題が埋め込まれたときに記憶が最も促進される。一方、最近になって実験室的状況における幼児の意図的記憶の有能性が見いだされるようになり、Weissberg et al.(1986)やSchneider & Brun(1987)ではIstominaの見解を支持しない結果が得られた。しかし、Rogoff & Mistry(1990)は有意味な記憶目標を提供するような文脈は記憶を促進することを見出している。本研究では、実験Ⅰで実験室的課題における方略使用、実験Ⅱで文脈の効果について検討する。仮説1；他者から与えられた体制化方略は記憶を促進しリハーサル方略は促進しない。仮説2；子どもが記憶目標を自ら設定しうる文脈(買物ごっこ)における記憶の方が実験室的条件よりも優れている。

## 実験Ⅰ

【方法】実験計画；2年齢×3条件(ﾘﾊｰｻﾙ・分類・統制)の2要因計画。被験児；保育園の年中児(m=5:0)、年長児(m=6:0)を各条件に12名ずつ。WPPSI「文章」の評価点において条件・年齢間に差はない。材料；16項目(TABLE1)の実物のミニチュア。手続き；材料提示後、ﾘﾊｰｻﾙ群・分類群には各記憶方略〔ﾘﾊｰｻﾙ方略・体制化方略(分類)〕を利用するよう教示した。統制群には特別な方略を与えない。その後(1)自由再生(2)手がかり再生を実施。

【結果と考察】ﾘﾊｰｻﾙ群・分類群では多くの被験児が教示された方略活動を実際に行っていた。自由再生数と手がかり再生数(TABLE2)について分散分析を行った結果、ともに条件の主効果が有意($p<.05$)となり、Scheffé法により対間比較すると分類群＞統制群≒ﾘﾊｰｻﾙ群間の差が有意であった。以上、実験Ⅰでは再生課題・手がかり再生課題で仮説1を支持する結果を得た。

## 実験Ⅱ

【方法】実験計画；2年齢×2条件の2要因計画。被験児；年中児・年長児を各条件に10名ずつ。材料；実験Ⅰと同じ項目の絵カード16枚。さらに買物群には母親と子どものペープサート、おはじき(お金)、買物かご。手続き；課題群は記憶課題の後に自由再生。買物群は買物ごっこの文脈で母親(実験者)が子ども(被験児)にピクニックに行くための買物を頼み、子どもは店で店主(実験者)に必要な品物を告げた(自由再生)【結果と考察】平均再生数(TABLE3)は年齢と条件の主効果が有意($p<.05$)であり、年長児は年中児よりも記憶成績が高く、買物条件におかれることで成績がよくなることが示唆された。年中児で文脈の効果がなかったのは買物群の手続きに問題点があったためと推察される。以上実験Ⅱの結果は仮説2を支持するものであった。しかし買物群にのみ与えた材料に関する機能的説明が記憶の有効な情報となっていた可能性があるので、実験Ⅲで検討した。

TABLE 1　実験で使用した材料の品目リスト

| 品目 | カテゴリー |
|---|---|
| おにぎり　サンドイッチ　りんご　バナナ | 食べ物 |
| コップ　皿　ナイフ　フォーク | 食器類 |
| 帽子　シャツ　ズボン〔スカート〕*1　くつ | 衣類 |
| 虫とりあみ　虫かご　ボール　縄とび | 遊び道具 |

*1：男児にはズボン、女児にはスカートを使用

TABLE 2　再生課題における平均再生数 (SD)

| ＼条件 | 自由再生 | | | 手がかり再生 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 年齢 | 統制 | ﾘﾊｰｻﾙ | 分類 | 統制 | ﾘﾊｰｻﾙ | 分類 |
| 年中 | 7.8 | 9.4 | 11.1 | 6.8 | 7.8 | 9.9 |
| | (2.0) | (2.3) | (3.0) | (3.5) | (1.7) | (2.8) |
| 年長 | 9.7 | 9.6 | 10.7 | 9.4 | 8.8 | 11.0 |
| | (1.6) | (2.6) | (3.6) | (2.7) | (2.3) | (3.4) |

## 実験Ⅲ

【方法】2年齢×3条件(課題・機能・買物)の2要因計画。機能群として新たに年中児・年長児各10名。機能群には買物群と同じ機能的説明を与えた。【結果と考察】機能群の平均再生数は年中児9.9(SD1.9)、年長児10.4(3.0)。分散分析の結果、買物群＞課題群の傾向($p<0.10$)がみられた(FIG.1)。実験Ⅱでの条件の効果は機能的な情報をも含めた文脈全体の効果であることが示唆され、仮説2を支持する方向性にある結果となった。

【総括的討論】幼児では記憶それ自体が求められる実験室的な課題状況よりも、自分が引き受けた役割を遂行する過程で記憶が求められたときに動機づけが高められ、記憶が促進されることが示唆された。遊びの文脈は幼児が日常生活の中で何かの目標を達成するために行なっている記憶活動に近い状況を再現していたと思われる。また実験室的状況では年中児においてすでに自発的にリハーサル方略を使用していること、与えられた体制化方略を利用しうることが示された。体制化的方略の自発的な使用による記憶活動は就学後に多く求められ経験されるようになり、意図的な記憶の効率性が高まっていくと考えられる。

TABLE 3　平均再生数

| 年齢 | 課題群 | 買物群 |
|---|---|---|
| 年中 | 8.3 | 9.4 |
| SD | (3.7) | (2.0) |
| 年長 | 9.3 | 11.9 |
| SD | (1.9) | (2.4) |

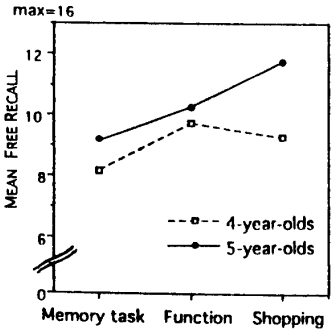


FIG.1 MEAN RECALL BY CONDITION



NII-Electronic Library Service